

須田一幸学兄との思い出

伊藤 邦 雄(一橋大学 教授)
Kunio Ito, Hitotsubashi University

私が一橋大学・中村忠先生の大学院ゼミナールに進学した3年後に入ってきたのが須田一幸君であった。私にとっては年齢が最も近い弟子に当たる。大変性格が良く、かつ向上心も人一倍高く、出身大学が違ったが年齢も近かったこともあり、私とは気が合い、すぐに親しくなった。いや私だけでなく、中村先生はもちろんのこと、他の諸先輩からも可愛がられた。以下、須田君との思い出を綴りたい。

私は博士後期課程1年次の冬に、ハーバード大学に研究調査に出かけることになった。当時は大学院生が海外に研究に出るなどというのは極めて珍しかったため、大学院生が集まってある夜、歓送会をしてくれることになった。それを当日聞きつけた中村先生が「じゃ、僕も出よう」ということで、恩師も参加することになった。その歓送会の幹事役を務めてくれたのが須田君だった。

ということで、その夜は15人ほどが集まり、それはそれは大変に盛り上がった。盛り上がり度と飲酒量との間の相関係数が極めて高いことは、改めて説明することもないであろう。あれほど楽しく、盛り上がった宴会は、私の経験でもそう多くはない。激しく盛り上がった宴会は、ときに会の終わりにいささか困った事態を招くことも少なくない。

案の定だった。会の予定終了時刻に参加者が「立ち上がれない」のである。大丈夫だったのは、須田君と私だけである（恩師の名誉のために言っておくと、私が恩師の中村先生と一緒に飲んだ多く

の機会の中で、「立ち上がれなかった」のはこの1回だけである）。私はもちろん送られる側であるから、それなりの緊張感があり、何とか無事だった。さすがに須田君は幹事役の強い責任感から、全く乱れなかった。生前、須田君と親交のあった諸賢はご記憶のことと思うが、同君は酒はあまり強くなく、すぐに顔が赤くなるほうである。中村先生の酒による訓練を受けたにもかかわらず、そこはあまり変わらなかったように思う。その須田君が、幹事役を立派に果たしてくれた。

これには、ある出来事が待ち受けていた。その夜、宴会が終わったので、私は中村先生のショルダーバッグと自分のバッグを持って店の外に出た。しかし、誰も店の外に出てこないで（出てくることができなかった！）、2つのバッグを店先の外側のドアの前に置いたまま、店内にみんなを呼びに戻ったのである。その後、店先に再び戻った時には、2つのバッグとも消えていた。中村先生のバッグの中には財布が入っていた。私のバッグの中には、当日はゼミでの発表もあったことから私にとっては貴重な資料が多く入っていた（一部はアメリカに持って行く資料）。その時の驚きとショックは今でも鮮明に覚えている。中村先生はその後、私を責めることは全くなかった。

それから時が流れ10年ほど経ったころ、私はスタンフォード大学で在外研究を行っていた。その期間中に、須田君が同大学に隣接するメンロパーク市の我が家を訪れた。同じころ、彼はロチェスター大学の客員研究員をしていたこともあり、わ

ざわざアメリカの最東からカリフォルニアに来てくれたのである。スタンフォード大学の構内を案内しながら、私たちは久々の旧交を温めた。当時、須田君はロチェスター大学でワッツ教授に師事し、当時台頭しつつあった契約理論に基づいた実証的会計理論を学んでいた。私のほうは、ビーバー教授のもとで、資本市場に焦点を当てた実証的会計研究を学んでいた。須田君も私も、アメリカでの体験がその後の研究の方向性に大きく影響を与えることになった。その意味で、須田君と私は似たような道程を辿ってきたように思う。

それから20年ほどが過ぎたとき、私は須田君とある研究会で一緒になった。東京証券取引所が行ってきた決算短信における業績予想開示の制度を見直すことを目的とした「上場会社における業績予想開示の在り方に関する研究会」が、東京証券取引所から日本証券経済研究所への委託によって2010年10月に設置されることになった。私は座長を拝命し、かつメンバーの選定も委ねられた。そこで、長年ディスクロージャーの研究を行ってきた須田君をメンバーにするよう事務局に要請した。もちろん当時、須田君がすでに体調を崩し、

厳しい状況にあることは知っていた。そのため、事務局には無理に頼むのではなく、須田君の意向を尊重し、ご本人が快諾されるのであれば、お願いするようにと伝えてあった。そして須田君から快諾をいただいた。

毎回、その強い責任感から、須田君は一生懸命メモを用意し、会議に臨んでいた。発言は適切かつ鋭いものであった。そして前向きであった。研究会が夕方に差し掛かることも多かったため、一定の時刻が来ると、須田君は大学での夜間の授業のため、中座した。その姿は痛々しく、胸が締め付けられる思いであった。研究会も最後の頃になり報告書をまとめる段階で、須田君の訃報を知った。研究会メンバーの全員一致で、研究会の成果である報告書を須田君に捧げることにした。

須田一幸君の研究者として清麗に取り組む姿勢、そして教育者として温かく接する姿勢は、多くの研究者や教え子の心に深く刻まれているに違いない。いまや恩師を、そして優秀な弟弟子を失い、寂寥感を禁じ得ない。

須田一幸先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。